巻頭言　―　もう一つの阿修羅として

門男は山梨県北都留郡ほかで、小正月の時に門戸のところに玄関先に向けて２体飾る（表紙）。門男の作り方は、まずヌルデを里山から伐ってきて、1メートル余の大きさの丸太にする。この丸太の端を削った半円形の白肌に墨で目鼻を描き、頭に竹の髷をつけ、次に藤蔓で腰紐をしつらえアーボ（粟穂）、ヘーボ（稗穂）、鍬、鎌をこれに挿す。思うに、門男は山の神の使いで、農耕の智恵と畑作雑穀の収穫を秋に向けて予祝するために各戸を訪れる者であったのであろう。しかし、今からは阿修羅として農山村の各戸に門男が復活し、共同社会と畑作雑穀が維持されるように、ともに活動することを願う。

このところ研究人生に秋霜烈日を思うようになったのか、身体的な衰えよりも未だ混沌として整理できない心の葛藤に感じやすい。自然崇拝、アニミズムなど信仰のあり方にも関心が向き、阿修羅の存在にとても興味をもつようになった。ひろさちや（2005）は『わたしの中の阿修羅』で傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に、「阿修羅よ、汝、諦めるべし」と確かに結論を下した。これにもかかわらず、興福寺の三面の阿修羅像に再び思いを致して、複雑な阿修羅のあり方を一つの結論にまとめきれず、もう一つの闘う阿修羅によって巻末を閉じざるを得なかった。まだ学生の頃であったか、読みふけったジョージ秋山（1970）の『アシュラ』はむしろ醜い子ども姿であったが、萩尾望都（1995）が『百億の昼と千億の夜』の中に描く阿修羅は美しい少女の姿である。新美南吉（1932）の『ごん狐』も阿修羅なのだ。宮沢賢治（1923）は心象スケッチ『春と修羅』中の１編「春と修羅」で、「はぎしり燃えてゆききする　おれはひとりの修羅なのだ」と詠っている。

こうしてみると、今、山の神の使いの門男になりたい私も一人の阿修羅なのだ。農山村の複雑多様な伝統智体系を学び、統合学の提案を求めて民族植物学に挑むことが、象徴的に言えば天道でも人道でもない、己や世間の醜を知り、美を求める阿修羅の道なのであろう。阿修羅の勝つことのない戦こそが誇り高く、忘れてはならないそれぞれの民族の、また私たちの歴史である。忘れてはならない多民族の自然文化誌に関する調査研究と生物文化多様性の現地保全を求め、民族植物学の発展を目指し、民族植物学研究室の成果をささやかな雑誌にまとめ、毎年１回発行することにしたい。

２００５．６．１９

（木俣美樹男　東京学芸大学環境教育実践施設　民族植物学研究室）